

鳩木節子の後日  
甘木数彦

第三章

二

節子の質問に、忠晴は驚いていた。まさか節子からそんなことを訊かれるとは思ってもみなかったのだろう。

「どうしたんだい、急に？ まさか汽一郎のヤツに変なこと吹き込まれたんじゃないだろうね」

仕方なく、節子は香奈から教えられた話を伝える。

「それにしても、節子ちゃんがそういう質問をしてくるとは意外だったなあ。普段はその、もっとう憤み深いイメージだったから」

その発言を耳にして、節子はひょっとしたら忠晴がものすごく「古風な人間」なのではないかという気がした。憤み深いという言葉を実際に誰かが使っている場面になど、これまで出会ったことがない。そもそも養子がどうこうという話題に憤みが関係するという発想も、やや古くさい。

「もうちょっと元気を出すように、香奈さんに言われて」

「ああ見えて、姉さんは面倒見がいいから」

どこか満足げな口調だ。

「で、実際のところどうなんです？」

「我ながら死んだ親父によく似てると思うけれど、さすがにね」

どうも受け答えがあやふやだ。

「じゃあ、幾つなんですか？」

「六七歳。歳の割に若く見えるだろ？」

「ええ。それじゃあ、伊助さんと出会ったときは四〇歳手前くらいですか」

「ま、そうなるな。誰がどう言ってるのかは知らないが」

あっさり肯定されると、それ以上は追求しにくい。不意に何もかもが面倒に感じられだした。

考えてみれば、どうして自分はこんなことをしているのか。こんなことをしている時間があつたら噂を封じ込める手段でも考えるか、町を巡回した方がいいはずだ。

けれどもまだ、香奈に叱られたショックからは立ち直れていなかった。そのせいで化け猫と向き合う気になれない。精神がずるずると重さを増していく。

「そっさいや、昨夜は猫の声がすごかったな」

忠晴は話題を変える。

「ここにずっと住んでいて、あんなことは初めてだ。あれはやっぱり化け猫なんだろうか」

「もしそうなら、今頃そこらじゅう化けネコだらけですよ」

憂鬱な気分を無視して表面上は愛想よく言ったものの、節子は化け猫という言葉の口に出すのも嫌だった。つい素っ気ない口調になってしまう。

「いやしかし、化け猫といえば神出鬼没だから」

「その件は私と香奈さんがどうにかしますから。安心してください」

忠晴の言葉を遮るように告げる。

「頼もしい。いやまったく、伊助がああだからね」

その声の芯底には僅かな冷たさが漂っている。

時計を見ると、もう店へと向かう時間だった。行きたくはないが、遅刻などしてこれ以上香奈の機嫌を損ねることは避けたい。節子は忠春との会話を切り上げると、古希堂を後にした。

店の前には人だかりができていた。人の間をかき分けて先頭へ出ると、入り口に香奈が立っていた。携帯で電話をしている。

節子は入り口脇の壁が傷付けられ、塗料が大きくはがれていることに気付いた。ちょうど大きな猫が爪を研いだかのようだ。最悪の気分叩き落とされる。

「外装業者にね」通話を終えた香奈は節子に気が付くと、携帯電話を振る。その口調はいつもと変わらない。「朝から嫌なことが二つ」

「もう一つは」

「汽一郎がやられたって。コンビニ行ったら幸弘が言ってた。本人が見たわけじゃないんだけど、深夜のシフトに入ってたバイトがね。猫が鳴いてた時間帯に、血まみれの汽一郎が店の前をよろよろ歩いてったんだってさ。いや汽一郎って名前は知らなかったらしいんだけど、フライングエイブのマスターって他にいないでしょう？　なんか服もぼろぼろで、背中に大きな傷があったって」

深刻な事態を、やけにあっさりとして香奈は伝える。被害者が出たというのに怒ってもいない。

「心配しないでよ。私、さっきマンションのゴミ捨て場で汽一郎に会ったんだから。べつに瀕死とかじゃなかった。たぶん店員の見間違いなんじゃないの？　その時間に汽一郎がコンビニの前を通ったのは本当かもしれないけど。だいたいそれなら、店の前の道にだって血痕が落ちてるはずでしょ？　だけどそんなものはないみたいだし」

香奈は壁の傷に目を向け、溜息をついた。骨っぽい肩が目に見えて下がる。

それ以上何が起こるといってもなく、仮くら井はその日の業務に入った。節子は三階で発送作業にいそしむ。香奈と顔を合わせずに済むのがありがたかった。

いつもと違って仕事ははかどらなかつた。壁に残った傷跡のことを考えてしまう。あれが猫の仕業だとしたら、その大きさは人間を超えるものになる。

短時間だったにせよそれほどの猫が既に現実化しているのなら、被害者が出るのは時間の問題だ。そうなれば、香奈は激怒するだろう。自分だってできれば犠牲者は出たくない。

昨夜、化け猫たちは出現してすぐに噂話へと戻った。この世界にまだしっかりと固定されていないということだろうか。しかしこの世界にはっきりとした痕跡を刻んだとなると、残された時間は少ない。猫によってつけられた壁の痕跡は逆に、猫の存在を補強するだろうからだ。

いったいどうすればいいのか。有効そうな手立てはなにも思い浮かばない。

三階は壁から部屋の中央へ向かって、たくさんの仮面が積み上げられている。その中心にソファセットと応接テーブル。それに棚が一つ。発送リストに記された仮面を求めて、節子は在庫の中に分け入る。

表面だけのうつろな顔が幾つも積み重なっているのが、最初は不気味に感じられた。それも今ではただの商品だ。このごろやっと、仮面の名前からだいたいどの辺りを探せばいいのかが解るようになってきた。

探しているのはインドネシア製の、蛇の悪霊の面だった。似たような物の中から、カタログに記載された写真を頼りにどうにか見つけ出す。

木彫りの仮面をつくづく眺める。注文した人や香奈には悪いが、どこがいいのか理解できない。扱っている商品の中には「面白い」「綺麗だ」と感じるものもあったが、数千円や数万円を払ってまで欲しいとは思えない。

そのとき節子は、香奈が仮面専門店を始めた理由を知らないことに気付いた。真っ先に質問してもよさそうなのに。その程度のことにはさへ関心が向いていなかった自分に、節子は不安を覚える。

しばらくすると、香奈が上がってきた。

「業者が来たから店はお休み」

そう言いつつソファに身を沈める。古びた革のソファは、香奈の体にピッタリとなじんでいるようだった。首だけを起こして、香奈は手にしたペットボトルのお茶を飲む。

沈黙が続いた。節子は何を言うべきか悩んだが、どう転んでもまた怒らせてしまうのではないかと不安だった。だが節子の中で気まずさは増すばかりで、一方的なプレッシャーはその場に座っていることさえ負担に感じさせた。

「あの、昨日はすみませんでした」

とりあえず謝ってみる。

「ああ。ま、もう怒ってないから」

サッパリとした口調で香奈は答えた。節子はまだ不安を抱きつつ、同時にそれが弱まるのを感じた。

「昨日はさすがにムカついたけどね。考えてみれば私だってなにもできてないわけで、あんたを責めてばかりってのも違うかな、と。反省したなら以後、化けネコ退治に励むように。爪痕のこともあるんだし、今度こそ本当に誰かが被害に遭うかもしれないんだから」節子は精一杯の誠実さが伝わるように祈りつつ、うなづく。あっさりとは許されたことが、新たなプレッシャーを生み出す。

「とりあえず、汽一郎さんに話を聞いてみます。もし猫が鳴いていた時間にお店にいたのなら、なにか見てるかもしれないですし」

熱っぽい口調で節子は言う。この場合そうした口調は逆に嘘くさいと解っていても、声が勝手に強まるのを止められない。

「そうだね。身近なところから当たってみるしかないもんね」

そこから話題はいつもの雑談へと移っていった。まだまだ売り上げは少ないもののネットショップが好調で、香奈は嬉しそうだった。

「香奈さんって、どうしてこのお店を開こうと思ったんですか？」

香奈は指を伸ばし、眼鏡を押し上げた。まだ少し、緊張感が抜けきらない。

「私さ、人の顔が見分けられないんだよね」

予想もしていなかった返答だ。どう反応すればいいのかわからず、節子は曖昧にうなづく。

「たとえば節子ちゃんの目とか鼻とか、パーツは解るわけ。でもそれが全体で顔として認

識できないっていうか。だから人は服装とか髪型とか声とかで見分けてる」

「それって、生まれつき、なんですか？」

「そう。生まれつきそんな感じだったから、自分でおかしいとは思ってなかったんだけどね。親がおかしいってことに気付いて医者に連れてかれて。脳に損傷があると相貌失認とかいって同じような状態になるらしいんだけど、私の場合は脳に損傷なんてなかった。それに相貌失認だと他にも症状があるらしいんだけど、私の場合はそんなこともないし。でまあ結局、消去法で心因性の何かだろうってことになってさ。でも精神科の方でも異常はないようだったことにね、なって。それはそれで納得できなくもないかな、なんてね」

香奈自身が特に困っていないからだろうか。やけにあっさりとした口調だ。

「でも、人形とか仮面とか」

「あ、そういうものの『顔』は認識できるわけよ。うん。人間だけがダメ」

「それで、仮面に興味を？」

「ま、そういうことだね。それと　　そうだ」

香奈は立ち上がると仮面の間を縫って壁際まで行き、積まれた山の間から古びた木箱を取り出した。なにやら箱書きが記されているが、節子には判読できない。

香奈は箱をテーブルの上へ置くと、蓋を開けた。

中から出てきたのは能面だった。額は小面みたいだが、眉間の辺りを境にしてなだらかに般若のような顔へと変わっている。ただしカタログとは違って般若のような部分の色は青黒く、小面のような部分との境は薄墨色にぼやけている。その中で強い朱色に塗られた目が鮮やかだった。

節子はその能面をどこかで見た覚えがあった。小面と般若を合成した顔立ちがユニークだと思ったのだ。香奈が手作した資料が収められているファイルだっただろうか。

「これは橋姫っていう面でさ、乱れ髪の女面と怨霊面との配合が絶妙でしょ？ 特に眉から目にかけての落差なんて、どれだけ見ても飽きない。ああ、この面は嫉妬に狂った女が丑の刻まじりをしてる姿を現わしたものでさ、口に松明をくわえてるって設定。だから普通は火に照らされた顔の部分はよく海老茶色に塗ったりするんだけど」

もう話についていけなくなっていた節子だったが、黙って続きを聞く。

「で、私の場合は大学時代にこの面と出会ったのも大きな切っ掛け。一目惚れしちゃってさ、能面から他の仮面にも本格的に関心が広がって今に至る、と。でさ、箱書きによると面の作者は『仮くら井』だって記してある。それが店名の由来。普通、面の制作者はそんな名前は名乗らないけどね。どうも今で言うところのインディーズとかアングラレーベルとか、そんな感じだったみたい。デザインも独特だし」

香奈から面を受け取る。記憶の中の写真に掲載されていたものよりも起伏の形状が複雑で大胆だ。そのくせ写実的な雰囲気強い。よほど大切に扱われてきたのだろう。塗装も褪せてはいない。

「さっき、精神的な理由で顔が見分けられないのはあるかも、みたいなこと言いましたよね」

香奈に面を返しながら尋ねる。

「まあね。そこにはそれなりの理由があるんだけど、それはまた今度」

そうして困ったような笑顔を見せる。

どうやらマンションの住人は、誰も彼も込み入った事情があるらしい。とはいえ、どんな込み入った事情も過去も全くない人などいるのだろうか。

社会経験に乏しく、長いあいだ限られた人たちとだけ接してきた節子にとって、それは判断のできないことだった。

「じゃ、休憩終わり。私も手伝うから発送準備を終わらせちゃおう」

残りの作業は倍以上のペースで進んだ。自分で分類しただけあって、香奈はどんな仮面もすぐに見つけ出してくる。節子はもっぱら宛名書きや梱包をしながら、仮面について講釈する香奈の声に耳を傾けた。

閉店間際のフライングエイブには、一人の客もいなかった。翌日は平日なのだから、特に不思議ではない。

「いらっしゃい」

カウンターの拭き掃除をしていた江沢弘文<sup>えざわひろふみ</sup>が顔を上げる。背が低く、角張った顔に頬ひげを生やし、一風変わった眼鏡をかけている。眉尻が下がっているので、いつも少し困っような印象を受ける。

弘文はフライングエイブのパーテンだ。フライングエイブの従業員はこの弘文と汽一郎の二人だけだった。

「マスター、お客さんです」

弘文に呼ばれて厨房から出てきた汽一郎は、客が節子であることに気付くと顔をほころばせた。

「こんばんわ。珍しいねこんな時間に。まあまあ、何か飲みなよ。フードも作るから」

そう言うと、再び厨房へ引っ込む。節子はメニューを眺めると、テキーラサンライズをオーダーした。

ほどなくして、汽一郎が戻ってきた。手にした皿にはローストビーフが盛られている。

「さて、と。もうこんな時間か。弘っちゃんはお疲れさん。上がっていいよ。後は俺がやるから」

弘文は汽一郎と節子に挨拶をすると帰り支度をして店を後にした。

「今日は、ちょっと用事があって来ました」

節子はローストビーフを一切れつまむと、香奈から聞いた話を汽一郎へ繰り返した。

「それ、本当のことだよ。デカイ猫にネズミと間違われてさ」

「にしては、元気そうですね」

節子は汽一郎の冗談に付き合う。

「俺は不死身だから」

汽一郎はそう言って笑みを浮かべる。

「ここで働いて、昼間は管理人の仕事。体力のある人だと思ってましたけど、そういうことだったんですね。で、本当はどうなんですか？」

節子の切り返しに、汽一郎は少し落胆したようだった。

「節子ちゃん、ひょっとして機嫌悪い？」

汽一郎の言葉に、節子は決まり悪さを感じた。つい任務で聞き込みをしていたときの態度が出てしまったのだ。

「そんなことないですよ」

節子は口角を持ち上げて、笑顔に見えないこともない表情を作る。

「それならいいんだけど……。昨日はもともと閉店が遅くなって、それから秋に出すカクテルとフードの新メニューを考えてたらさらに遅くなって。で、たぶんそれくらいの時間にコンビニの前も通ったろうと思う。眠気でフラフラしてたから、目の錯覚とかネコの声とかが合わさって瀕死に見えたんじゃないか。向こうも疲れてたろうし」

「ネコが鳴いてたことには気付いてたんですね」

汽一郎はカウンターに両手を突いて身を乗り出し、苦笑する。

「尋問みたいだな。そりゃあ、あれだけ騒がしければ気付くよ」

「外は？」

「ああ。店から出てみた。ただ、ネコは一匹もいなかったぞ。すぐその辺から鳴いてるような感じだったんだけどなあ。さすがに変だと思って少し探して歩いたんだけど、見付からなかった。鳴き声もわりとすぐに消えたし」

節子はテキーラサンライズをもう一杯注文すると、考え込む。結局のところ、噂はどれくらい現実化しているのだろうか。声だけが現実化するなど、今までなかった事態だ。そもそも物理的な基盤がないのに、どうして声が存在できるのだろうか。

そもそも節子たちが耳にしていたよりも、伊助に鳴き声をが聞こえていた時間はずいぶん長いようだ。これはどういうことなのか。

眉間を押し潰す勢いで考えていると、ふいに汽一郎の手が伸びてきて眼鏡を取られた。

「意外と美人とか何とかいうよりは、違和感が強いな」

汽一郎はすぐに眼鏡を差し出す。

「なんなんですか、もう」

節子は眼鏡を掛け直すと、レンズ越しに汽一郎を軽くにらむ。

「冗談だって。なんか今日は強気だね」

節子は長々と溜息をついた。手にしたグラスを力無くテーブルへ置く。それはむしろ、少し上からテーブルへ落とすといった方がいいような動きだった。

「つい昔の感じが出ちゃうんですよ」

そうして節子は、化けネコの噂にまつわる懸念を大まかに語った。

「それならさ、じいさん辺りはいい知恵持ってるんじゃないか？ ま、ボケかかっているからロクな話は聞けないだろうけど」

節子は忠春が、伊助の戦いにどの程度関与していたのかを知らなかった。

かつて見た資料から、伊助が現役時代から忠春のところへ身を寄せたことは知っていた。だが、それ以上のことは興味もなかったのも、当時は資料を詳しく閲覧していなかったのだ。

もし忠春がたいして知らないのなら、聞くだけ無駄になってしまう。それで何が困るでもないが、どれくらい係わっていたのか気にはなる。節子はそれを正直に打ち明けた。

「どれくらい詳しいか、なあ。その資料とかいうのを調べればいいんだろ」

「今の状況では、絶対に見させてもらえないですよ」

「正面からは、な。昭平に聞いてみるよ。あいつならどっかから手に入れてくれるだろ」  
言われてみれば確かに、昭平は節子や伊助の情報もどこからか入手していた。それを思え

ば過去の資料だって手に入るかもしれない。

「でもあの人、ちょっと」

「慣れればどうってことないって。悪い人じゃないし。それに、節子ちゃんに危害を加えられるはずないんだし。俺からメールしといてやるよ」

「あの、じゃあお願いします」

「任せて。で、それはそれとして、そろそろ閉店にしようと思うんだけど」

節子は汽一郎が言わんとすることを察する。損をするわけでなし、お礼の意味も込めて少しくらい付き合ってもいいような気がした。

「じゃ、ここで待ってますから」

「お、悪いな」

汽一郎は手早く残りの閉店作業を終わらせ、二人は店を出た。

深夜だというのに、店から出ると重たい空気が漂っていた。気が緩んだのか、汽一郎は大きなあくびをする。普段の感じからすると、唇が裂けそうなくらい口が開く。

「毎日、どれくらい寝てるんですか？」

「んあ？ 日によって違うけど、今日なら四時間くらい。まあ普通だ」

汽一郎はしきりに目をこすりながら答える。

「よく体力保ちますね」

「不死身だから」

どうやら不死身ネタは汽一郎のお気に入りらしい。

「不死身といえば、忠春さんも不死身なんじゃないかって話を聞きましたよ」

「あ、ちょっと待って」

汽一郎は立ち止まると、自販機で缶コーヒーを買った。

「節子ちゃんは？」

「コーラで」

汽一郎から手渡されたコーラはよく冷えていた。夏限定のロング缶だ。

「で、なんだっけ？」

「忠春さんが不死身らしいって話ですよ。戦前からここに居たとか」

「それが本当なら、はた迷惑な話だな。あれか。憎まれっ子世にはばかるとか言う。でも、それはありえないだろ」

「そうなんですか？」

「だってあのじいさん、怪我とか病気とか異様に警戒してるしな。管理人の仕事をしていないのも、たとえば脚立から落ちたりするのが嫌だからなんだぞ。不死身ならそんなこと気にするもんか。あれは絶対、命が惜しくてたまらないってタイプだ」

どうしても少し感情的になってしまうのか、汽一郎は忠春について喋るといつもより早口になる。

「ま、あんな永久にくたばり損なったような年寄りのことなんて話す必要ない。短い夏の夜なんだ。もうちょっと楽しい話をしないか？ 蒸し暑くてネコが出そうだけど」

二人の影は前に後ろに長々と伸びている。シャッターの降りた商店街はいつもより間延びして感じられた。

「そういえば、節子ちゃんはまだ化けネコって見てない？」

「見てません」節子は慌てて否定してから、質問する「なにか、そんな話が？」

「いや、姉さんからあんまりそういう話はしないように言われたんだけど、やっぱり気になるから。実害もあるし」

「え？ 誰か」

節子の慌てぶりがおかしかったのか、汽一郎は笑う。

「ほら、みんな警戒して夜もすぐに帰っちゃうから。こっちは客が減って弱ってるんだよ」  
汽一郎は月を仰いでおおげさに嘆いてみせる。あまり深刻そうではない。

「汽一郎さんは襲われるの、怖くないんですか」

口元へ缶を運ぶ手を止め、汽一郎は横目で節子を見た。

「俺はべつに」

「でも、凶暴だったり巨大だったりするんですよ？ それこそ本当に背中をざっくり、なんてことだって」

「それならそれで、しょうがないだろ。そりゃまあ、死ぬってのがどんなもんか実際に知らないから言えることかもしれないけど。あ、死ぬのが怖くないとか死にたいとかってわけじゃないんだ。そりゃ当たり前か。なに言ってるんだ俺は」

汽一郎はコーヒーを飲もうとし、顔をしかめた。缶を振っても音がしない。空なのだ。茶色い缶の表面を、街灯の投げる光が鈍く滑る。

「私は、死ぬのも怪我するのも怖いです。だからこの人たちにだって危ない目には遭ってほしくない。香奈さんもそう言ってました」

「姉さんはともかく、節子ちゃんもそうだなって意外だな。てっきり慣れてるのかと。あ、周りが傷つくことになってんじゃないかと、自分が危険な目に遭うことに。いやいや、慣れたからって、そういう目には遭わないのが一番いいわけであって」

やはり疲労が溜まっているのだろうか。伊助は上手く頭が回っていないらしい。

節子はゆっくりと吐息だけで笑った。自然と出てきたその笑いは、とても疲れて感じられた。

「むしろ、どんどん嫌になりますよ。どんなに丈夫で死にくくても、痛いものは痛いです。それに誰かから暴力をふるわれるのは、悲しい気持ちになります」

「そうか。慣れたからって、嫌なもんは嫌だよな。ごめん。気い遣えてなくて。悪かった。申し訳ない。ごめん」

汽一郎の謝り方は本当に申し訳なさそうで、ただ謝るばかりの姿は年齢よりもずっと若い、一〇代くらいの少年のようでもあった。

「いいんですよ。あんまり謝らないでください。ほら、むしろ私がすっごく重いこと言ったような感じになっちゃいますし」

「あ、そうか」

汽一郎は黙り込んでしまう。客商売をしているのに、妙なところで人のあしらいが不器用だ。

「おい、ほら。ネコがまた」

あちこちから一斉に猫の鳴き声が挙がった。まるで何かを唱和しているようだ。

節子は周囲を探った。臭いもしないし姿も見えない。高いところから猫が飛び降りる物

音さえ聞こえない。汽一郎が語ったとおり、鳴き声以外はなにもないようだった。

目を閉じてさらに集中すると、感覚器官が体からさまよい出ていく錯覚に捉えられる。

微かに四つ脚の足音が聞こえた。ゆっくりと二人の方へ近づいてくる。肉球がアスファルトをこする音から察するに、相手はかなり大きいようだ。

「汽一郎さん。お店まで走っていただけますか？」

「あ？ どした？」

用心深く周囲を眺めていた汽一郎は、節子の顔を見つめた。

「大きなネコが近づいています。汽一郎さんは逃げてください」

そういうと節子は眼鏡を外し、変身を開始する。服を脱いでる暇はない。

「変身するから、見ないで！」

今や足音は、人間の聴力でもどうにかとらえられるくらいに接近していた。汽一郎は節子に背を向け、耳を澄ませる。

「あれ、本当に足音か」

節子に背を向けたまま、汽一郎は驚いている。

「そのはずです」

節子は自信なげに答えた。身体の変化に伴って声がいぶん変わっている。地面の影が醜く変貌する。

音は増え、一匹の猫の足音にしては多すぎるくらいだった。どんどん重々しさが失われている。変身しながら節子は音がする方を見遣った。

音は急速に重みを失い続け、とうとう節子たちの立っている通りへ出る手前で消えてしまった。猫の声もやむ。

「消えた」

「いや、まだだ」

汽一郎が緊張した声で言う。と、角を曲がって足跡が突進してきた。しかし姿はない。

節子は足音が到達する寸前、後方へ跳んだ。視界の端に見えた汽一郎は、ちょうどその場から走って離れるところだった。

風圧が起こり、アスファルトに爪痕が残る。見えない猫は一声鳴くと、今度こそ本当に消えた。

変身の際に節子の服が破れたしまったため、二人は店まで引き返した。汽一郎は節子の前を歩き、一度も振り返らなかった。

中へ入ると節子は変身を解き、店の奥にあった汽一郎の着替えを借りた。シャツもズボンも大きすぎたが、裸よりはいい。

「で、あれは何だったんだ？」

汽一郎は二人分のお茶を入れて厨房から出てくると、節子に聞いた。

「化けネコ、なんででしょうね。実体はまだないんですが。さっき起きたことは、もし化けネコがああときあそこに実在したら起こりえる出来事だった。そうした現象が先行することで、逆に化けネコの実体化が促進されるんだと思います。すぐに消えたのは、たぶんまだしっかりと現実世界に定着してないせいでしょう。今までにこんな例はなかったので、思いつきなんですけど」

汽一郎は首筋をさすりながらうなずく。

「思い付きにしても、それだけ整然と語れるってのはすごいよ。ただ、俺はあの場にいたからそうかもなって思えるけど、その説明だけ聞いて信じる奴なんていないだろうな」

「そうですね。私も言いながら、都合のよすぎる説明だって気はしますから。それならあちこちにこっそりスピーカーを埋めてるとかの方がまだ信じられる気もしますね」

「そういうことはない？」

「ない、ですね。こんな場所で誰にも気付かれず実行するのは難しいでしょう」

汽一郎はまたうなずくと、体に目を落としてふとももを叩いた。蚊でもいたのだろう。

「それにしても、どうしてまだネコが消えてないって判ったんですか？ それにネコが襲いかかったとき、少しも動きませんでしたよね」

「カンだよ。昔からカンが鋭いんだ」

初耳だった。それに、カンだけで「まだだ」という言葉が出てくるとは信じがたい。むしろ

。「本当は昨日の夜も、同じようなことがあったんじゃないですか」

その方が自然に思える。

「まさか。それなら先に逃げてるよ」

「不死身なんですよ？」

ごく真面目な声で節子は言う。

「冗談を真に受けるなって。それよりほら、帰ろう」

二人は店を出た。汽一郎はすこし先を歩く。話しかけられるのを避けているようだ。

立ち仕事で体にコリが溜まっているのか、汽一郎は歩きながら時折、肩や腰をほぐすような仕草を繰り返す。そのたびに、地面に落ちた薄い影もふわふわと歪んだ。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>